

『シャーロット・ブロンテの生涯』研究 (18)

メアリ・ロビンソン

芦澤久江

1. はじめに

ギaskell (Elizabeth Cleghorn Gaskell) の『シャーロット・ブロンテの生涯』(*The Life of Charlotte Brontë*, 1855) が出版され、シャーロット (Charlotte Brontë) だけでなく父親パトリック (Patrick Brontë) の出自についても詳しく研究されるようになった。特にライト (William Wright) は独自の調査により父親の生まれた家さえも特定した。その真偽は定かではないものの (Barker 2)、現在ではその場所がパトリックの生まれた家として信じられている。その後メアリ・ロビンソン (Mary Robinson) がエミリ・ブロンテの伝記を書き、エミリを描いた初めての伝記として尊重された。女性で詩人のメアリ・ロビンソンがエミリ・ブロンテをどのようにとらえていたかという点は大変興味深い。ところがメアリ・ロビンソンはブランウェル (Branwell Brontë) の悪評がいったん収まったにもかかわらず、再び蒸し返してブランウェルを擁護したレイランド (Francis Leyland) から批判を受けたのも事実である。しかしその後、エミリの伝記を扱ったものはシャーロットと比べると圧倒的に少ない。なぜならエミリに関する資料がほとんどないからである。

少ない資料のなかでメアリ・ロビンソンはどのようにエミリ・ブロンテを描いたのであろうか。小論では特にメアリ・ロビンソンが描くエミリ・ブロンテ論の特徴を考察したいと思う。

2. 家系

メアリ・ロビンソンはまず、エミリに限らずブロンテの子どもたちが両親からどのような遺伝を引き継いだかという点に着目している。ロビンソンによれば、エミリが持っていた文学的才能は両親から受け継いだものではない(8)として、次のように述べている。

Emily Brontë was born of parents without any peculiar talent of literature. It is true that her mother's letters are precisely and prettily written. It is true that her father published a few tracts and religious poems. But in neither case is there any vestige of literary or poetical endowment (8).

このようにロビンソンはたとえパトリックが宗教の小冊子や詩を出版したことがあったとしても、

そこには文学的、詩的才能の痕跡はないとしている(8)。確かに娘エミリの作品と比べればパトリックの作品は後世に残る作品ではない。娘が偉大な作品を残したからこそ、彼の作品が再び見直されているということは事実である。娘たちの功績なしにパトリックの作品が今日読まれることがなかったということは確かなことと言える。しかし果たしてパトリックには文学的、詩的才能の萌芽がなかったと断定できるのであろうか。パトリックの作品は人々に宗教の重要性を説く啓蒙的なものであったために、文学作品としては価値の低いものになっていたかもしれないが、庶民に理解しにくい宗教を恋愛物語に変えて伝えている点には彼の文学的センスがうかがえる。またシャーロットの初期作品「アルビオンとマリーナ」(“Albion and Marina”)にパトリックの作品が影響を与えたことは物語のあらすじを比べてみれば明らかである。

またロビンソンは母親マライア(Maria Branwell Brontë)の手紙について“precisely”で“prettily”に書かれていると言っている(8)ものの、彼女の作品については述べていない。ギャスケルはマライアの文学的才能はなかった(83)と述べながら、その作品については平易ですぐれている(83)と称讃している。ギャスケルはマライアの作品を最大限のほめ言葉では賛美しているが、結局、雑誌編集者の目には留まらなかった。それゆえマライアの文学的センスはパトリックより劣っていたと言えるかもしれない。実際マライアの作品を見れば、雑誌に採用される価値のあるものではなかった。彼女はパトリックが牧師であり、作品を投稿しているのを見て、自分自身も何かしなければという使命感のようなものに衝き動かされ書いたと思われるが、貧しい人についての観察や分析は希薄であり、文章もギャスケルが言うような平易(83)な文章とは言いがたく、決して理解しやすいとは思われない。ただ、この時代に女性がこのようなことに関心を持ち、雑誌に投稿しようとしたその気概は賞賛すべきものである。したがってパトリックについてもマライアについても本を読むだけでなく作品を残そうと試みたという点で、文学的関心が非常に高く、創作意欲が一般の人々よりも強かったと言える。そのように考えると、ブロンテたちが子どもの頃から初期作品を書いて修練していたことは当然のこととして納得でき、それはまさに両親の文学的関心の高さを引き継いだことの表れだとわたしには思われる。

ロビンソンは、ブロンテの文才は両親から受け継いでいながらも、性格や病気については両親から遺伝したものと述べている(9)。たとえば母親の病弱なところをブロンテきょうだいは受け継ぎ、父親の神経質な特徴は姉妹に見られ、また情熱と意志も授けられた(Robinson 9)。唯一の息子ブランウェルは父親にそっくりではなく、父親より弱く、粘り強くはなかった(9)。母親の性格で言えば、我慢強く、道徳的な面を姉妹は引き継いでいた(Robinson 9)。

ロビンソンが特に重要視している点は両親のケルト民族の血を引いているということであった(9-10)。ブロンテ姉妹の作品は超自然的傾向、想像、恐怖が表されている(Robinson 10)。このようにロビンソンはケルト民族であることの重要性を指摘しているものの、それ以上詳しくは分析していない。

ロビンソンがブロンテの両親について次に問題にしたことは、マライアがパトリックと結婚する以前から幸せではなかったということである(13)。これはギャスケルの描いたパトリック像を踏

襲するものである。ギaskellはシャーロットの粗野な性格はパトリックの風変りな性格によるものだという印象操作をして、シャーロットを弁護しようとした。そのためパトリックのイメージは悪いものになってしまった。

そのように読んでくると、ロビンソンはエミリを弁護するためにパトリックを酷評しようとしたのであろうかとさえ思われる。ロビンソンにはそのような意図はなかったように思われる。ロビンソンがギaskellの伝記から得た情報によって、ロビンソン自身がパトリックに悪感情を持っているからではないであろうか。結果としてロビンソンはギaskellよりもパトリックを悪く描いている。なぜなら二人が結婚する前のエピソードを持ち出して、マライアは結婚する前から不幸だったとしているからである。ロビンソンは以下のように書いている。

“Miss Branwell’s letters showed that her engagement, though not a prolonged one, was not as happy as it ought to have been. There was a pathos of apprehension (though gently expressed) in part of the correspondence lest Mr. Brontë should cool in his affection towards her, and the readers perceived with some indignation that there had been a just cause for this apprehension. Mr. Brontë, with all his iron strength and power of will, had his weakness, and one which, whatever it exists, spoils and debases the character— he had *personal vanity*. Miss Branwell’s finer nature rose above such weakness; but she suffered all the more from evidences of it in one to whom she had given in her affections and whom she was longing to look up to in all things.” (13)

この引用には出典がなく、ロビンソンがどこから引用したのか明らかではない。ギaskellの『シャーロット・ブロンテの生涯』からの引用でないことは確かである。ここで言われている結婚の延期というのは、マライアの荷物を載せた船が座礁し、すべて海の藻屑となったため、結婚を延期するという問題が出ていたということであり、パトリックとの関係が不和になったからという意味ではない。ただしこの引用にあるように、マライアの手紙からミスター・ブロンテの愛情が冷たくなるのではないかという不安な気持ちを抱いていたことは確かである (Robinson 13)。結婚前マライアは何度もパトリックに落胆させられている。たとえば友人ジェインがパトリックの友人でありジェイン (Jane Morgan) の婚約者ウィリアム・モーガン (William Morgan) への手紙をパトリックから渡してほしいと頼んだが、彼は忘れていたし、マライアがパトリックの気持ちを疑って憂鬱な気分になったりすることもあった (Wright 77)。それは部分的にはパトリックの不注意によるものであったかもしれないし、マライアの気持ちへの配慮が足りなかった証だったのかもしれない。いずれにしてもマライアの期待をししばしばパトリックが裏切っていたのは事実である。

これに関するエピソードをギaskellは述べていない。しかしロビンソンは結婚前のパトリック宛てのマライアの手紙を読む機会があったのであろう。ギaskellは結婚前のマライアの手紙を読んでいたが、マライアがパトリックの態度に不安になっていることは書かれていない。ロビンソン

は結婚前からマライアが幸せではなく (13)、結婚後はもっと不幸であったとしている (16)。そしてロビンソンはギャスケルが書いたパトリックの風変わりな習慣を繰り返し、一方でマライアは一切不満を口に出さず亡くなっていったとしている (17)。これはギャスケルが使った戦略によく似ている。パトリックを酷評して、そこで耐え続ける妻の姿を強調するものである。前述したようにギャスケルはパトリックを自己中心的な父親として書くことでシャーロットの粗野な性格をカバーし、さらにはそのような父親に仕える忠実な娘として強調することが目的だったが、ロビンソンがなぜこのような書き方をしたのか、その意図はわからない。ロビンソンはギャスケルの影響を受け、彼女の書き方を踏襲していただけかもしれない。

このようにしてロビンソンはギャスケルの書く両親像を踏襲し、特に新たな発見などは見られない。ブロンテの子どもたちは性格や病気は両親から受け継いだが、文才については何の影響も受けていないと断言しているのである (Robinson 9)。

3. 子ども時代

ロビンソンの著書において、母親が亡くなった後の家の様子、カウアン・ブリッジの説明はすべてギャスケルと変わりなく、特筆すべきことはない。ただギャスケルはシャーロットとブランウェルが遊び相手だったとしたのに対し、ロビンソンはエミリとブランウェルがお互いに信頼し強い絆で結ばれていたとしている (45)。のちにロビンソンはエミリがブランウェルが墮落してからも面倒を看たとして、エミリがブランウェルを支える献身的な妹であったことを読者に印象づけようとしている。興味深いことに、これはギャスケルが取った戦略と同じである。ギャスケルはパトリックを悪い父親と描き、その父親のもとでどれほどシャーロットが献身的な娘として仕えたかということを読者に強く印象づけ、共感と哀れみを誘った。一方ロビンソンはブランウェルを墮落した兄を懸命に支える妹というイメージを作って、エミリの印象を操作しようとしていた。

ギャスケルはエミリについてはいい印象をもっていなかったようである。その結果、ロビンソンはギャスケルが作ったエミリのイメージを壊す必要があったのだ。ギャスケルにとってエミリは理解しがたい存在だったのであろう。シャーロットとエレン (Ellen Nussey) がロウ・ヘッド (Roe Head) で友だちとなり、1833年夏エレンが初めてハウスを尋ねたときのエミリについてギャスケルは次のように述べている。

The first impression made on the visitor by the sisters of her school-friend was, that Emily was a tall, long-armed girl, more fully grown than her elder sister; extremely reserved in manner. I distinguish reserve from shyness, because I imagine shyness would please, if it knew how; whereas, reserve is indifferent whether it pleases or not. Anne, like her elder sister, was shy; Emily was reserved. (147)

ギaskellはエミリに会ったことがなかったけれども、エミリの極端な人見知りの性格をアンの性格と比較している。エミリは「寡黙」だが、アン (Anne Brontë) は「恥ずかしがりや」としている (Gaskell 147)。アンは他人を思いやることができるが、どのように振る舞えばよいかわからないだけで、エミリは他人の気持ちなど考えずに人と打ち解けようとしていないことを暗示している。この記述はエミリを直接批判はしていないが、ギaskellがエミリに対して好印象をもっていなかったことは明らかで、読者もまたエミリは父親に似た風変りな人間だという印象をもったにちがいない。

実際エミリはギaskellが述べているように、一般には理解されない性格であったかもしれないが、わざわざアンと対比してエミリの異常な人見知りの性格を強調する必要もなかったように思われる。ギaskellはエミリもシャーロットを悩ませた人として父親パトリック、兄弟ブランウェルとともに一様に考えていたのではないかと思われる。これまでギaskellがエミリをそのように考えていたと述べている批評家はいないけれども、ギaskellのエミリの書き方にはシャーロットを弁護するような姿勢は見出せない。あるいは弁護しないとしても、エミリに対しての批評を加える必要はない。しかしギaskellのエミリへの視線は冷たく、シャーロットを悩ませる家族の一人としてとらえていたと思われる。

これに対してロビンソンはエミリの弁護を目的として書いているので、ギaskellの書き方とは違って、より意図的である。ロビンソンは次のように述べている。

In 1833 Emily was nearly fifteen, a tall long-armed girl, full grown, elastic of tread; with a slight figure that looked queenly in her best dresses, but loose and boyish when she slouched over the moors, whistling to her dogs, and taking long strides over the rough earth. (48)

容姿についてはギaskellの記述とまったく同じで、背の高い腕の長い少女であったと書かれている。しかしギaskellはエミリが人と打ち解けようとしないう性格であった (147) ことを持ち出しているが、エミリをロビンソンは次のように述べている。

The first time that Ellen stayed at Haworth, Charlotte was ill one day she could not go out with her friend. To their surprise Emily volunteered to take the stranger a walk over the moors... The two girls at last came home. "How did Emily behave?" asked Charlotte, eagerly, drawing her friend aside. She had behaved well; she had shown her true self, her noble, energetic, truthful soul, and from that day there was a real friendship between gentle Ellen and intractable Emily. (53)

ここではエミリがエレンと荒野に出かけ、心配していたシャーロットの予想に反して、エミリは

エレンに対してしっかりと振る舞うことができ、最終的には友情が芽生えたことを明らかにしている(53)。このようにギャスケルはエミリの極端な人見知りの部分を描いただけで、その後エミリとエレンと一緒に荒野に行ったことは省いている。これにはギャスケルの意図が働いている。ギャスケルはエミリを弁護しようと思えば、荒野にエレンを連れて行ったエミリの様子を描くことは可能であった。それゆえギャスケルは最初からエミリを弁護するつもりはなかったと思われるのである。

ロビンソンはエミリがエレンと友情を育んだことを述べてエミリを弁護しようとしているが、エミリの人見知りについては隠しようがなかったようで、エミリがいかにか人と会うのを極端に避けていたかというエピソードをいくつも物語っている。しかしここでギャスケルとロビンソンの意図の違いが思い起こされる。ギャスケルはブロンテ家の誰を敵に回したとしても、シャーロットの献身的で女性らしい部分を強調し、19世紀の読者にシャーロットを受け入れてもらおうと試みた。すなわち、小説家としてのシャーロットの才能は切り捨て、一人の女性としてのシャーロットを人々の前に作り上げようとしたのである。しかしロビンソンはエミリの人間として、女性としての部分を読者に見せることが目的ではなく、エミリの天才を賛美することであったので、エミリの性格に欠陥があったと非難されても、エミリの才能は稀有で揺るがないものであり、エミリの人間性のすばらしさを評価することにはあまり価値がないのである。したがってエミリの極端な人見知りのエピソードを披露したとしても、エミリの才能を汚すことにはならない。それゆえギャスケルのように、ロビンソンはエミリの伝記的事実を歪曲して語る必要はなかったのである。

ロビンソンはロウ・ヘッドにエミリが行き、ホームシックによって帰ったこと、ハリファックスでの学校の日課に耐えられなかったことなどギャスケルが書いていることを一通り述べている。前述したように、これらはシャーロットの手紙などで明らかにされているので隠すことのできない事実である。そのうえギャスケルの伝記でもすべて語られているので、否定することなどできない。したがってロビンソンはこれらのエピソードを並べて書いているだけである。しかしギャスケルが語っている以上の事実はどこにも見当たらず、彼女独自の視点も展開されていない。つまりエミリの子ども時代が作品にどのようにつながっていったのかは語られていないのである。

4. 詩

ギャスケルがエミリの性格を理解できなかったことは前述したとおりであるが、彼女はエミリの作品も高く評価することができなかった。というのはエミリの詩についても『嵐が丘』についても評価をしようとしていないからである。それに反してロビンソンは詩人であるので、エミリの詩をどのように解釈しているか興味深いところである。

そこでロビンソンの詩の解釈を見てみよう。ロビンソンはエミリの初期の作品について次のように述べている。

The light that should be lit was indeed of supernatural brightness; a flame from under the earth; a flame of lightening from the skies; a beacon of awful warning. Although so much is scarcely evident in these early poems, gleaming with fantastic glow-worm fires, fairy prettinesses, or burning as solemnly and pale as tapers lit in daylight round a bier, yet in whatever shape, “the light that never was on sea or land,” the strange transfiguring shine of imagination, is present there. (128)

ここでロビンソンが述べている「光」とは想像の光である。「明かり」は「超自然的明るさ」であり、「大地の下から」あるいは「空から」の「炎」ではないのである。それは異様に輝く「青白い」光は形を自由に変えるのである。ロビンソンが言うように、エミリの想像の光は決して健全な光を発するものではないかもしれない。ほの暗い妖精の光のように怪しく魔法にかけられた光のようなものであると言えるであろう。

ロビンソンはエミリの詩は女性の書くものではなく、コウルリッジ、ブレイクと通じ合うものがあると主張する (129)。確かにエミリの詩はロマン派であるが、なかでもコウルリッジの神秘的な側面、ブレイクの二律背反に関しては類似しているものがある。

ロビンソンは次の詩を引用している。

“Hope was but a timid friend:
She sat without the grand den,
Watching how fate would tend,
Even as selfish-hearted men.

“She was cruel in her fear;
Though the bears, one dreary day,
I looked out to see her there.
And she turned her face away.!”

ロビンソンはこの詩がここで終わっていたら、完璧だったと述べている (129)。また「それらが追及している効果は情緒ではなく、確信ではなく、美あるいは恐怖あるいはエクスタシーの印象である」と言う (Robinson 130)。ロビンソンが言及しているように、この詩にはある種の恐怖や緊張があることは確かである。「希望は臆病な友人にすぎない」ので、決して明るい兆しは見えてこない。それどころか「自己中のな人」のように「運命」を見守るだけである。そのような希望があるであろうか。さらに希望はわたしが見たとき、「顔を背けてしまった」。しかし一方でまったく背を向けてしまったわけではないので、絶望ではないが、「顔を背けてしまった」という態度から「わたしは」確信が持てない状態になり、読者の気分は曖昧な状態に置き去りにされたままとなる。

さらにロビンソンはエミリの「哲学者」の詩を取り上げて次のように述べている。

What we care for is the surprising energy with which the successive image are projected, the earnest ring of the verse, the imagination which invests all its changes.
(132)

このようにロビンソンは「哲学者」においても想像力の変化を賛美している(132)。また次の詩を引用し、寝室の向こうに広がっている世界をいかに見ていたかを物語っているとしている(Robinson 134)。

“And oh, how slow that keen-eyed star
Has tracked the chilly grey;
What, watching yet! how very far
The morning lies away.”

この活気に満ちた直接的な描き方は『嵐が丘』におけるキャサリンの荒野の描写を思い起こさせる(Robinson 134)。またロビンソンは“Death”を取り上げて、詩の中にある情熱、イメージを超えた音楽と称え、さらによりすぐれた詩として1845年3月に書かれた“Remembrance”を挙げ(135)、それよりも優れた詩としては“The Old Stoic”を挙げている(136)。この詩はすばらしく生氣にあふれている詩人の作であるとロビンソンは断言している(137)。初期の頃の詩は想像がいかに向こう見ずで恐ろしいものであったが、またときに甘い空想もあった。それでもやはり死、希望のない別れ、狂気、苦悶がしばしば描かれている(Robinson 137)。激しい情熱の周りには孤独、悲しみ、墮落などがあり、人生はつらく、厳しいものであるため、そのためエミリは空想をより強く歓迎していたのである(Robinson 137-38)。

しかしこうした詩をシャーロットは理解していなかった。実際シャーロットの詩はアンの詩よりも出来栄が悪かったので(Robinson 139)、ロビンソンはこのようにエミリの詩を取り上げて解釈を施している。彼女は全体的にエミリの想像を称えているが、この時点では「ゴンドル」については触れていない。「ゴンドル」の物語は現在でも解明されておらず、登場人物さえ特定するのも困難であるので、ロビンソンが「ゴンドル」に言及するのは不可能であったであろう。しかしエミリ自身が「ゴンドル」と「ノン・ゴンドル」を分けているので、それについての言及は必要であったと思われる。ロビンソンはエミリの克己的精神を代表するエピソード、狂犬にかまれてエミリが自分自身にひのしを当てたり、ブランウェルの部屋の家事をすぐに消し去ったことなどを書いているにもかかわらず、エミリの克己的精神を詩から読み取ってはいない。エミリの詩の特徴はさまざまあるけれども、ロビンソンが言及したのはエミリの想像力の力強さを述べている部分だけである。“The Old Stoic”に触れる場合にはエミリの詩に流れるストイックな精神にも言及すべきものだった

たと思われる。

5. 『嵐が丘』の起源

ロビンソンは『嵐が丘』の起源を探るにあたって、まずシャーロットの『嵐が丘』の序文につけた伝記的介绍を引用している (156)。ロビンソンがこれを引用したのは、シャーロットがエミリの経験不足を述べることによってエミリを弁護していたからかもしれない。しかしロビンソンはエミリの知識不足や経験不足というよりも、彼女の性格に基づいた経験が『嵐が丘』を書かせたと述べている。

It was not lack of knowledge of the world that made the novel she wrote become 'Wuthering Heights,' not her inexperience, but rather her experience, limited and perverse, indeed, and specialized by a most singular temperament, yet closed and real. (156)

さらに同じ環境にありながらもシャーロットとエミリは違ったものを生み出したとロビンソンは述べている。

The fact that Charlotte Brontë knew chiefly clergyman is largely responsible for 'Shirley,' that satirical eulogy of the Church and apotheosis of Sunday-school teachers. But Emily, living in the same clerical evangelic atmosphere, is revolted, forced to the other extreme. (157)

ハウスの福音主義の雰囲気の影響を受けながらも、彼女は母なる大地への愛こそ偉大であり、墓には確かな安らぎがあると信じていた (Robinson 157)。すなわちエミリの世界はシャーロットが指摘したように経験不足から来ているのではないということである。

さらにリードはブランウェルとヒースクリフの類似性を指摘したが、ロビンソンはヒースクリフの息子にブランウェルは似ているという (161)。しかしロビンソンはこの理由については述べていない。

また印象的な部分はキャサリンが結婚してからのヒースクリフとの関係だとロビンソンは主張する (162)。それはブランウェルの姿を思い起こさせる。すなわちブランウェルの不倫事件を意味している。ブランウェルは家庭教師先のロビンソン夫人と恋愛関係に陥り、最終的に失恋する。ブランウェルのロビンソン夫人に宛てた手紙のなかにある "My own life without her will be hell" という言葉はキャサリンを失ったヒースクリフのセリフに似ているとロビンソンは指摘する (162)。そしてブランウェルこそがヒースクリフであり、エミリの実人生においてもっとも近い場所にいた

モデルなのだとロビンソンは主張するのである (163)。

6. おわりに

ロビンソンはエミリの生涯についてギaskellの伝記を踏襲し、何ら特別に新しい見解を提示してはいるわけではない。またエミリの人生に対する解釈についてもこれと目新しいものは示していない。エミリは秘密主義者で、伝記的資料がほとんど残されていないため、ロビンソンは、シャーロットが友人に宛てた手紙や、エレン・ナッシーの証言を伝記的資料として利用するしかなかった。そのためロビンソンは独自でエミリの資料を入手できず、新たなエミリの生涯を提示することができなかった。

しかし問題はロビンソンがギaskellの伝記の戦略を真似ているにすぎないことにある。前述したように、ギaskellはシャーロットを弁護するためにパトリックとブランウェルを悪者にした。シャーロットはこの二人の男性の犠牲になったとするギaskellの描き方は読者に理解しやすく、人々の同情をかきたてた。ロビンソンもまた、全体的にエミリは兄ブランウェルの犠牲者であるという印象を読者に与えようとしている。だがエミリを理解する場合に、こうした戦略がどうしても必要だったのか。

ブランウェルの墮落を強調することで、エミリの風変りな性格を覆い隠せるものではない。エミリの性格はギaskellのような人々からは理解されないかもしれないが、そのようなことは問題にはならない。なぜならエミリの場合、性格が問題になるのではなく、彼女の天才に読者は関心があるからである。つまりエミリの性格が一般の人々と違っていてもそれを批判する人はなく、むしろエミリの稀有な才能に注目が集まり、彼女の天才は賞賛されるのである。したがってロビンソンが目指すべきゴールはエミリの稀有な才能がどのようにして生まれたかを分析し、エミリの詩や『嵐が丘』の真価を示すことだったのである。

前述したように、乏しい資料からエミリの伝記を描くのは難しいことであるが、ロビンソンのようにエミリの性格を弁護する必要はない。エミリの価値は彼女の性格にあるのではなく、彼女の残した作品にある。エミリがブランウェルに優しかったとするエピソードを強調しても、それはエミリの風変りな性格をわずかに修正するのみである。エミリは自立し、一人立っており、弁護などする必要はなく、彼女は偉大な作品を残しているのである。しかしロビンソンはエミリの詩を評価しているものの、エミリの全体的思想を網羅するまでには至っていない。また『嵐が丘』の解釈においても細かい読みはなされておらず、ロビンソンは墮落したブランウェルからエミリがヒントを得て『嵐が丘』を書いたとしている (161-62)。それゆえロビンソンの描くエミリ像では、エミリを解明するまでには至っていないのである。

引用文献

Barker, Juliet. *The Brontës*. London: Weidenfield and Nicholson.1994.

Gaskell, Elizabeth C. *The Life of Charlotte Brontë*

Reid, Wemyss T. *Charlotte Brontë*. London: Macmillan and Co. 1877.

Robinson, A. Mary F. *Emily Brontë*. London: W.H. Allen and Co. 1883.

Wright, Sharon. *The Mother of the Brontës*. Yorkshire, Philadelphia: Pen and Sword Books Ltd. 2019.